



『横浜の金魚の帽子おじさん』2006年頃  
コーン、発泡スチロール、人形、造花、  
プラスチックボトル、小物、ビニールひも など  
862×615×592mm

### 宮間 英次郎 Eijiro Miyama

1934年～ / 神奈川県在住

今年(2011年)で77歳になる宮間さんは、奇妙な帽子と衣服を身につけ、横浜の街を自転車に乗って走り回るのが日課です。自分の部屋で念入りにふん装をし、ずっしりと重い帽子を片手で支えつつ、器用に自転車に乗って人ごみの中をゆっくりと走りぬけます。様々な廃品を集め、独自のアイデアで飾られた奇妙なかぶり物は、帽子というより王冠のようです。フィギュア、アクセサリ、看板など、気に入った拾い物があふれんばかりに取り付けられています。時には、びんに入った生きた金魚もぶら下がっているのです。

若い頃は日雇い労働で町を転々として生きてきたそうです。そんな彼がこの変貌ぶり、何ごとだと思おうでしょう。彼の話はこうです。

「子どもの頃から身体も弱く貧しかった。いつもいじめられて人生楽しいことなど何もなかった」

60歳の頃、ある日、ふと思いついて、カップラーメンの容器を頭にかぶって歩いてみたら、人が振り返った。次にそれに造花を刺してみたら、何人もの人が振り返った。今まで感じたことのないワクワク感に包まれ、「幸せな気持ちになった」というのです。こうして徐々に激しく巨大に、帽子は発展をとげていったようです。

彼は結婚をすることもなく、各地を転々とする孤独な生活でしたが、高齢になり残りの生き方を考えはじめた時から、「自分が自分であることの表現の喜び」に目覚めたのです。表現をすることは絵や陶芸などに限りません。ダンスや演劇のように自分の身体を使って「自分の生きるスタイルを表現する」という彼の方法は、実にユニークでパワフルなアール・ブリュットそのものです。



宮間 英次郎

横浜の繁華街で自転車に乗る宮間さん